

第19回石井十次賞の贈呈式の様子

第20回石井十次顕彰のつどいは、年明け早々から流行し始めた新型のインフルエンザのためやむなく今回は中止せざるを得なくなりました。西小の児童は校内にて学年参観で学年ごとに「しのぶ会」で発表されました



石井十次先生生誕記念式典にて 小澤町長のあいさつ



中学校2年生へ英文石井十次物語の贈呈

多額のご寄付をいただき ありがとうございます。
厚くお礼申し上げます。

寄付者報告第19号

● 21. 7. 21~22. 6. 30

篤志寄付

宮崎市 印刷センタークロダ
宮崎市 藤井慶一
東京都 津上和子
高鍋町 福本幸良
川南町 渡部博
高鍋町 湯浅紀久子
高鍋町 SSグループ代表
高鍋町 舞鶴一座 秋月鼓童
高鍋町 立正佼成会 三島希巴江

忌明寄付

高鍋町 柿原サエ
高鍋町 伊藤武子
高鍋町 谷川佐和子
高鍋町 岩切洋

(敬称略)

あとがき

時代の進化とともに、病原ウイルスの進化も急速を極め、鳥インフルエンザにはじまり、新型インフル、口蹄疫など人畜への災害も拡大して驚くばかりです。特に畜産農家の方々には、心からのお見舞いを申し上げます。一日でも早くこの非常事態が終結することを願ってやみません。県民ごぞってのご理解とご協力をお願いいたします。

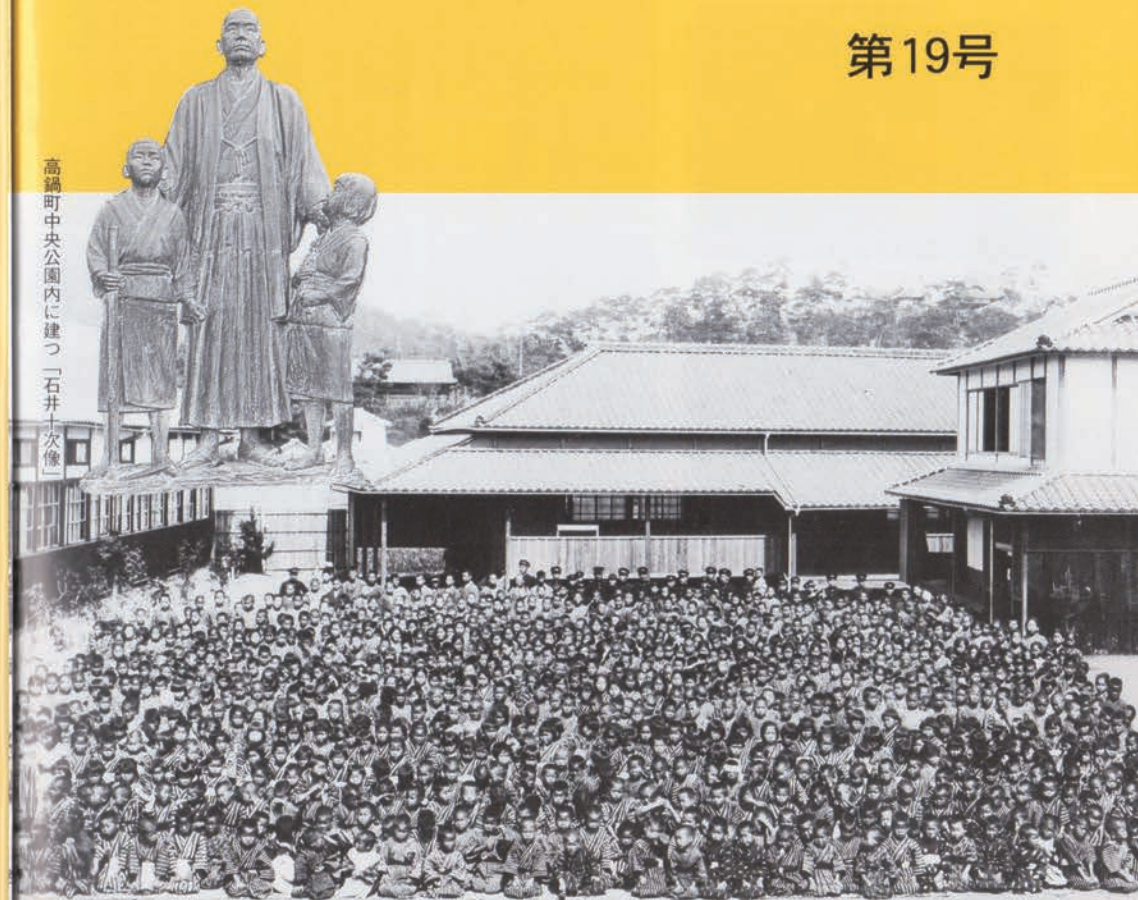
「顕彰会だより」第19号をお届けいたします。

財団法人 石井十次顕彰会

〒884-0006
宮崎県児湯郡高鍋町大字上江8113番地
TEL 0983-23-4312

石井十次顕彰会だより

第19号



高鍋町中央公園内に建つ「石井十次像」

1200人余りの孤児で一杯の岡山孤児院(明治39年・西暦1906年)

財団法人 石井十次顕彰会



愛媛慈善会 仲田 和夫 理事長



愛媛慈善会 黒田 和幸 施設長



愛媛慈善会 正面玄関



地域交流ホーム 栄松館



明治39年設立当時の孤児



ソフトボール県大会にて優勝

平成四年の第一回石井十次賞（北海道家庭学校）以来、第十九回（社会福祉法人 愛媛慈善会）となり、平成二十二年四月十二日に、その贈呈式を行いました。併せて、生誕記念式典の後発表していただいた小中高校生の文章をお届けします。

第19回石

井十次賞

これ 大正時代になって孤児院の外に感化院、養老院などの福祉事業に取り組んでこられました。昭和二十七年に社会福祉法人に組織替えをされこの周知の障害児、発達障害児等に配慮し特殊学級を設置され高等部では職業指導にも力をいれ社会で自立可能な資質の育成にとめてきました。平成十三年には創立百周年を迎え今日までに二千五百人を越す園児を育てられました。

平成二十二年四月十二日

財団法人 石井十次顕彰会
理事長 税田 格十

石井十次賞

社会福祉法人
愛媛慈善会 様

孤児救済を自らの天職と定め 五十年の生涯を捧げた児童社会福祉事業の先駆者 石井十次の人類愛と社会奉仕の崇高な精神を永遠に継承し 愛の心 思いやりの心を全国に広めるために石井十次賞を制定しました。貴慈善会は明治三十四年 仲田銀行頭取仲田 傳之助会長はじめ有志の方々によって孤児・貧困児救済の目的をもって設立され当初の収容児は九名でした。その後財団法人の許可を受け明治二十九年の東北地方の大凶作のおりには岩手県から二十五名の孤児を収容し養育・教育さ



税田理事長より賞状を黒田 和幸施設長へ



謝辞を述べられる黒田 和幸施設長



中学校2年生へ英文石井十次物語を贈呈



意見発表の町内小・中・高校生



園芸クラブ 秋の収穫イモほり



みんなで楽しい夕食風景



なでしこコーラスの石井十次の歌

「第19回石井十次賞」受賞者紹介

「第19回石井十次賞」候補者募集を、平成21年12月末を期限として全国都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会及び個人推薦人にお願ひしました。推薦していただいたその候補者のうちから、平成22年2月23日、東京都において選考委員会を開催し、審査の結果下記の施設に決定いたしました。



社会福祉法人 愛媛慈恵会

理事長 仲田和夫

住所 愛媛県松山市東本二丁目13番3号
TEL (089)921-1035
FAX (089)921-9850

【施設の紹介】

愛媛慈恵会は、明治34年7月26日、孤児、貧困児を中心とする窮民救済の目的をもって設立され設立当初の収容児は9名であった。創始者は仲田銀行頭取仲田伝之助会長(初代理事長)はじめ、栗田幸次郎氏(二代目理事長)、吉田政常氏、本城徹心氏らが一丸となって会員募集に奔走され設立趣意書を配布し広く賛同を訴えられた。

明治37年11月22日に財団法人として内務省から許可がおりた。明治39年8月には東北地方の大凶作により岩手県から25名の孤児を収容し、学齢児童には学校から帰ると経木真田(きょうざなだ)を編んでは、若干の収入で生活の足しに職員共々努力をしている。その後、孤児院、感化院、養老院を運営していたが感化院は大正3年4月1日に県に移管、養老院は昭和20年7月26日に戦災をうけた影響から鄰保館へ経営を委託した

昭和23年1月1日、児童福祉法の制定と共に養護施設として発足し、昭和27年5月17日財団法人から社会福祉法人として改組され、専ら養護事業に専念することになった。(当時収容定員100名、現在105名)

昭和28年10月22日には昭和天皇を奉迎し、陛下より「しっかりやって下さい」とのお言葉を賜りそれを励みに終始一貫、設立趣意の精神により児童福祉問題に取り組み邁進してきた。

その間。昭和30年ごろから収容児童にも変化が見られ養護施設にも知的障害児、性格異常児、軽度発達障害児などが多く措置されるようになってきた。これらの児童は収容児の3分の1以上にも及んだことがある。こうした現状から中学生の特殊学級の設置を要望し、昭和31年1月に設置許可がでて職業指導や鍛錬に力をいれ昭和53年3月までの22年間にわたり生活自立可能な社会人の育成に努めた。

平成13年に100周年を迎え記念式典を行っている。設立から現在に至るまでおよそ2500名の園児が育っている。平成22年度には施設の改築が予定されておりさらに前進した施設に変身して躍進しようとしている。現在、幼児7名、小学生40名、中学生21名、高校生20名、合計88名が市内のそれぞれの学校に元気に通っている。



全力で取り組む

高鍋東小学校 5年 長町桃香

私は、4年生の時、石井十次先生のことについて調べました。

十次先生は、みんなとはちがう心をもっていると思います。なぜかと言うと、自分の大切な夢を捨て、今やるべきことに全力で取り組むことができる人だからです。もし私だったら、大切なことを忘れて後回しにしたりして、自分のやりたいことばかり考えてしまうかも知れません。十次先生は、周りの人が困っていることとそのために自分に何ができるかを考えていたことが分かり、すごく尊敬できる人だと思います。

22才から48才までの間に、十次先生は何千人にも及ぶご児のお世話をしていきました。私が想像できないような大変な苦労があったのでは?と思いました。でも、十次先生はご児への思い・やさしさが大きかったから、ご児を守るというやるべきことに全力で取り組めたと思います。

1914年に十次先生はなくなりました。きっと多くの人たちが悲しんだことでしょう。しかし十次先生のご児を思う強い気持ちはしっかりと今の時代にまで引きつがれていると思います。十次先生は、みんなに、やさしさと自分にできることがあれば全力で取り組むことの大切さを教えてくれました。

私は十次先生みたいになれないかも知れないけれど、まわりに困っている人がいたら、やさしく声をかけることのできる人になりたいです。

4月から高学年である5年生になりました。だから、身近なことから人にやさしくしたり、学校のために自分のために今やるべきことに全力で取り組めたりできる5年生になるよう、努力していきます。



十次先生の心を現代へ

高鍋東中学校 2年 内村 絵梨

孤児の父、石井十次先生。私が十次先生について知ったのは、小学校に入学したあのころです。知ったといっても、名前や顔がわかる程度で、そのころはあまりよく理解していませんでした。ですが、総合学習の時間などで十次先生の行ったことについて知り、強い意志と優しさのある、素晴らしい人なのだと思うようになりました。

その十次先生の生き方の中で、最も印象に残ったことがあります。それは、医者を目指していた十次先生が、孤児を救うために医者になることをあきらめ、一生を孤児救済にささげたということです。もし、自分が十次先生と同じ立場だったときに、苦しく、難しい道を選ぶことができるでしょうか。私にはできません。そう考えてみると、このことは十次先生にとっても、それをこれから支えていくことになる品子夫人にとっても、大きな決断だったと思います。

孤児を救った十次先生は、孤児院での教育の中で「学ぶこと、働くこと」を大切にされていました。この二点を十次先生が大切にされていた理由は、子どもたちが将来社会に出たときに独立して生きていく力を身に付けさせたいという思いからです。私は、このことを知り、今だけではなくその先まで考えて教育を行っていたのだと驚きました。十次先生の孤児に対する気持ちは、とても強いものだったのだと思います。今の自分は、部活や勉強などで、家の手伝いなどほとんどできていません。ですが、いずれは社会に出て自立していかなければなりません。まだ、はっきりとした夢はありませんが、普段の生活の中で、自分の力となるものを見つけ、将来に役立てたいと思います。

また、悪い行いをした子どもに罰を与えず、密室教育と呼ばれる反省方法で子どもに反省させていたところも、十次先生の素晴らしいところだと思います。

現在の社会において体罰は本当に少なくなりました。しかし、ニュースなどを見ると、体罰がなくなるにともない、悪いことをした人への対処までもあやふやになり、「この人は本当に反省しているのかな」と疑問に思うことがあります。私自身も母に注意されたとき、厳しく言われなかったのをいいことに軽く考え、後日同じような失敗をしてしまったことがあります。そういったことから考えてみると、やはり反省とはとても大切なことなのだと思います。だからこそ、十次先生のように一人一人と向き合い、時間をかけてじっくりと話すことを大切にすると良いのではないのでしょうか。しかし、このじっくり話すということは、時間がかかるでしょうし、根気もいると思います。それでも、「少しずつでも」とじっくり行うことで、相手の気持ちも変わっていくのではないかと思います。

私は、十次先生から強い意志をもつことと反省することの大切さを学びました。十次先生の教育は、厳しさの中に優しさがあります。自分に厳しく、他人に優しい十次先生のような生き方を見習い、思いやりのある社会にしていきたいと思っています。



私の生きる道

宮崎県立高鍋農業高等学校 畜産科 3年 松元 武蔵

皆さん、「農高牛乳」をご存じですか。この牛乳は、私たち畜産科の生徒が牧場で大切に育てた乳牛から搾った新鮮な牛乳です。毎朝朝食とともに農高牛乳をいただいて、明倫寮生である私の一日も始まります。

私は、非農家の生まれです。農業とは何の関わりもなく過ごしてきた私が、まさか自ら乳牛の世話をし、乳を搾っているなんて以前の自分には想像もできないことでした。というのも、中学3年の夏に、周りの友達が次々と進路を決定していく中、私は一人漠然と悩んでいました。ぐずぐずしている私を見かねた担任の先生は、工業高校を勧めてくださいました。ですが、その学校はあまり自分に向いていないと感じました。

秋になり、最終決定の日が近付き、私はまだ悩んでいました。そんな時、あるテレビ番組を見ました。それは、北海道の生キャラメルで有名な花畑牧場を特集した番組でした。私は、それを見て「農業は素晴らしい」と心から感じました。それで、単純な私は農業がしたいと思い、両親や先生に相談すると高鍋農業高校を薦めてくださいました。その時、私は正直迷いました。高鍋農業高校は、3年間の全寮制で今までとは違う生活になってしまうことが怖かったからです。昔の私は、自分に甘すぎる面がありました。難しいことはやらない、怖いことはやらない、自分で限界を勝手に判断してそういうことから逃げてきました。だから、いざという時に物事ははっきりと決められず、ずっとくよくよ悩んでいるばかりでした。そんな自分がイヤで、変えたくて、だから私は高鍋農業高校を受験しました。

無事に本校に入学した私は、今までとは大きく違う高校生活がスタートしました。はじめは、慣れない寮生活や親しい友達もいない学校生活があまりうまくいかず、落ち込むことが多くありました。しかし、そんな私を奮い立たせてくれたのが、牧場での実習活動でした。牛や豚の飼育、搾乳、それら全ての活動が新鮮で興味を惹かれました。専門学習班も、迷わず酪農班に決めました。最初のうちは、知らないことだらけで、何をしたらいいのか全くわかりませんでした。先輩方にいろいろと教わり、仕事をするにつれて酪農の良さや大変さ、農業という仕事は365日気が抜けないということを、牛とともに送る生活の中で感じてきました。私は今、高鍋農業高校畜産科の最上級生になりました。2年前まで何も知らなかった私が、今は後輩に教える立場です。牧場で体験したことを、しっかりと後輩に伝え、自らもさらに実践力を高めていきたいと思っています。そして牛と接することで命の尊さや自然を愛する気持ちを大切にしながら、最後の一年を充実させたいと考えています。

私は、将来酪農家として牧場を経営したいと考えています。非農家の私にとっては、大変困難な目標かもしれませんが、この困難に立ち向かうと決意をしました。以前学校で、高鍋町の偉人「石井十次」先生のことを学ぶ機会がありました。その時は、あまり深く考えていなかったのですが、自分の将来のことを真剣に考えはじめたとき、生涯を孤児救済に捧げられた先生の功績を思い出し、将来の夢実現に向け勇気をいただいたように思います。労働を尊び、思いやりの心や自然を愛する気持ちを持ちながら、全精力を注がれた先生の教育は本当にすごいと感じました。自分の将来の夢も、何もない一からの挑戦になります。長く困難な道になるかもしれませんが、牛の命を大切に、牧場で培った勤労の精神を忘れず、困難に立ち向かっていくつもりです。そして必ず立派な牧場経営者となり、おいしい牛乳を食卓に届けたいと思います。

私の生きる道、それは大きな夢かもしれませんが、十次先生が生涯を捧げられたと同じように、自分も全精力を酪農の道に注ぎ夢実現を果たしたいと思っています。



The Great Person ~Ishii Juji

Takanabe-Higashi J.H.S.
3rd grade Ryo Yanagibashi

When he was six or seven years of age, Juji was dressed by his mother in a new kimono with a fine belt for the harvest festival. "Now you look handsome! Why don't you go outside and play?", said his mother. Juji ran over to the shrine, his heart beating with joy. A small boy was sobbing near the gate of the shrine. "What wrong, Matsukichi?" Juji asked. But he guessed from the way Matsukichi was dressed, humbly in a torn kimono with a rope for a belt, that he was being snubbed by his friends. "Stop crying, Matsukichi, I'll give you my belt," said Juji, taking off his belt for Matsukichi. Then he led Matsukichi over to his friends, to join them and play.

In the evening, Juji went home, only to be asked by his mother What had become of his belt. Juji told her the truth honestly, though he was afraid that he might be scolded for what he had done. But his mother gave him a gentle smile, and said. "Is that right? Good for you. Matsukichi must have been very happy." His mother's response inspired Juji to begin his community work.

This is the well known story of Ishii Juji. As you know, he is one of the greatest people from Takanabe. I have often been taught Mr. Ishii's teachings since my childhood. Now I respect him and I'm very proud of him.

There are words Mr. Ishii left: 信— To believe in each other, 愛— To love each other, 和— To live together in harmony. I always keep them in mind, and I try to do my best to be a useful person for society.

郷土の偉人 ~石井十次先生

高鍋東中学校 3年 柳 橋 遼

十次が6歳か7歳の時、村の祭りの時にと、母親からよそ行きの帯を作ってもらった。「よく似合っ
ておいでだよ。それで遊んでおいでなさい。」母親に言われて、十次はわくわくしながら神社へ向かっ
た。すると、神社の入り口のところで小さな男の子が泣いていた。「松吉、どうしたんだい。」十次は、
松吉の縄の帯をして破けた着物を着た貧しいようすから、他の子たちからのけ者にされているのを悟っ
た。「泣くのをやめ、松吉。私の帯をあげるから。」十次は自分の帯をはずして松吉に与えた。こう
して、十次は松吉をみんなの仲間に入れてあげたのである。

その晩、十次は帯のことを母親に言いあぐねていた。そして、怒られるかもしれないと思いながら
も、正直に話をした。しかし、母親は優しい笑みを浮かべて言った。「そうだったのですか。いいこ
とをしましたね。松吉はさぞ喜んだことでしょう。」この時の母親のことばが、後に十次が行う福祉
事業へと導くことになった。

これは、石井十次先生がよく知られた話です。みなさんもご存じのように石井先生は高鍋の偉人の
ひとりです。私は小さいときから石井十次先生の教えを教わってきました。そして、今、石井先生の
ことを尊敬し、誇りに思っています。

石井先生が残した言葉があります。「信～お互いに信じること、愛～お互いに愛しあうこと、和～
仲良く支え合って生きること」私はこの言葉をいつも心にとどめています。そして社会に貢献できる
人になっていきたいと思っています。



Mr. Ishii Juji

Takanabe-Nishi J.H.S.
3rd grade Tamai Chihiro

Until I came to Takanabe West Junior High School last year, I didn't know much about Mr. Ishii Juji.

It was through my reading in Moral Education class that I first learned the details of his life. It seems he was a person of great public spirit, and when he felt strongly about something, he would do it there and then. He set up the Goshisha company when he was seventeen, formed Babanoharu's Board of Education aged twenty, and at twenty-three he began educating children who had no parents. After reading about his achievements, I thought to myself, "Had he been doing all those things with a clear view for the future?" However, being Mr. Ishii, he probably would have done those things anyway, even without a bigger plan. I think this is because what he really wanted was to help people in need.

With more and more children coming to him, for ten years he struggled with the choice between staying to teach them, or that of studying medicine. In the end, he chose the children. People who knew this said, "He's crazy!", and looked down on him. His friends felt sorry for him; surely he'd made a mistake. However, I think Mr. Ishii had a strong will and would not change his mind or quit something he had started. That is how he made such a big decision.

I think that even today, people can learn by following Mr. Ishii Juji's example, of making sure we achieve everything we have to do in life, and decide to do.

石井十次先生

高鍋西中学校 3年 玉井千裕

私は去年ここへ転校してくるまで石井十次先生のことを知りませんでした。道徳の時間に資料を読んで初めて詳しいことを知りました。石井先生は義侠心が強く、感激したら即実行するという性格だったそうです。石井先生は17歳で五指社を結成20歳で馬場原教育委員会を組織し23歳で孤児教育を始めました。私はそのことを読んで見通しを持ってこのようなことをしているのだろうかと思いました。でも石井先生なら、もし先が見えなくてもこのようなことをするでしょう。石井先生の本当にやりたかったことがこの人を助けるということだったと思うからです。

石井先生は孤児が増えていくなかでこのまま孤児教育を進めるか、医学の勉強をするかで十年間も悩みました。結局孤児教育を進めていくのですがそれを見て人々は「彼はくるってしまった」とかけ口を言い友人は悲しみました。確かに失敗するかもしれませんが。でも石井先生は、一度決心したことは曲げない、途中でやめないという強い意志を持っていたからこのような一大決心ができたのだと思います。

自分のやらなければならないと思ったこと、やりたいと思ったことをやり通す石井先生の姿勢は、今の私達も見習わなければならないと思いました。